

わがまち自慢

～市長室から～

つるが
福井県敦賀市
かわせ かつはる
河瀬 一治 市長



古くから交流拠点都市として 発展してきたまち

私たちのまち敦賀市は、天然の良港を擁し、古くから海陸交通の要衝でした。古代には朝鮮半島や中国大陸との交流、中世から近世にかけても北前船の中継地であり、明治時代には日本海側で最初に鉄道が開通したところなのです。

明治35年に、敦賀港からロシアのウラジオストクへの航路が開設されると、明治43年には日本から東清鉄道への国際連絡運輸が開始され、東京駅より、ヨーロッパへの直通列車が運行し、ここ敦賀を経由して、内外の人々が、我が国とヨーロッパを往来していました。

また、敦賀港は「人道の港」ともいわれています。

第二次世界大戦中、リトアニアの領事代理であった杉原千畝さんはナチス・ドイツの迫害から逃れるユダヤ人難民のために、本国外務省の許可が得られないまま「命のビザ」を発給し続けました。

このビザを持ったユダヤ人難民はシベリア鉄道を経由して敦賀港に次々と上陸されました。その数は6,000人とも報じられており、難民に温かい援助の手を差し伸べた敦賀市民の対応は、数々のエピソードとして残されています。

このように、敦賀は陸と海を結ぶ「鉄道と港のまち」として発展してきました。

誰もが住みたくなる 魅力あるまちづくりを

こうした敦賀の歴史文化資源が集積しているのが市内の金ヶ崎周辺です。ここには、「旧敦賀港駅舎」や「人道の港 敦賀ムゼウム」があります。来年10月には、全国で初めての鉄道と港のジオラマを配した「ジオラマ館」と、明治38年に建設された赤レンガ倉庫の、古きたたずまいを活かした「レストラン館」がオープンします。本市が最も輝いていた明治後期から昭和初期の時代の雰囲気や、訪れる皆様に満喫していただきたいと思っています。

今、戦国史がブームですが、「金ヶ崎崩れ」と呼ばれる有名な織田信長の撤退戦の舞台になったのも、この敦賀です。朝倉義景軍と浅井長政軍に挟まれた織田軍が木下秀吉を中心に、撤退戦を行っており、その中心となった金ヶ崎城址は港の近くににあります。信長・秀吉・徳川家康をはじめ、戦国の武将たちが勢ぞろいした地となっています。このほか、北陸道の総鎮守である氣比神宮や日本三大松原である氣比の松原などはよく知られている敦賀の名所です。

敦賀ふぐや越前ガニなどの魚介類もよく知られていますが、「手すき

おぼろ昆布」は、敦賀が北前船の中継地であったところからの特産品です。その8割以上がここ敦賀で加工されています。蝦夷地から昆布が運ばれて来て、ここで加工され京都の人々の食膳にのぼったのでしょう。

このほか、敦賀は、ミカン栽培の北限地で、江戸時代から栽培されました。リンゴ栽培の南限地でもあり、伝統野菜である赤カブもよく知られています。

本年4月に、敦賀駅が整備され玄関口の新たなシンボルとして「オルパーク」という交流施設をオープンしました。「いつも人が集まって“おる”」スペースになることを願い、名づけられました。また、ヘブライ語で「オル」は「絆」を意味します。市民はもちろんのこと、敦賀を訪れていただく皆様との絆を深めていけることを心から願っております。

全国の市を対象に、東洋経済新報社が毎年発表する「住みよさランキング」では、おかげさまで2013年度総合ランキング18位に評価されました。

私どもは「世界をつなぐ港まち みんなで拓く交流拠点都市 敦賀」を将来都市像に定めております。今後も、知恵を絞って、誰もが住みたくなる魅力あるまちづくりを進めてまいります。(談)



「旧敦賀港駅舎」。内部は鉄道資料館になっている



全国の8割以上を生産する「手すきおぼろ昆布」



杉原千畝の紹介やユダヤ人と敦賀の人々の交流などを展示する「人道の港 敦賀ムゼウム」



北陸の総鎮守・氣比神宮。木造としては日本三大鳥居のひとつ

日本三大松原のひとつ氣比の松原

